

「隅に置けない」 熊野・色川地区の仕事と活動



＝ 農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一 ＝

10月下旬に家内、娘と3人で紀伊半島を一周してきた。熊野の語源は「こもる」にあり、「奥まった辺境の地」を意味するともいわれるようだ。確かに山深く、「紀ノ國（くに）」は「木の国」でもあることを実感させられる。

神武天皇が東征の際、八咫鳥（やたがらす）に導かれ、熊野から大和に入ったという話に象徴されるように、隅には位置するものの、都や中心との関係は濃厚で、まさに「隅に置けない」地域であると同時に、古代からの自然信仰が今も息づいており、不思議な魅力を秘める。博物学者の南方熊楠や合気道の植芝盛平が、和歌山の出であることが納得される。

ほぼ事前に準備する時間もなく、新宮市から和歌山市までレンタカーを乗り回し、那智勝浦町、田辺市、和歌山市に宿泊先を手配しただけの行き当たりばったりの旅。一つだけ、某委員会でご一緒している那智勝浦町の色川地区（旧色川村）に住むH氏に連絡し、どこかお薦めの訪問場所はないかと尋ねたところ、同じ色川にある「らくだ舎」へ行けば、地域の話の聞いたり昼食を取ったりすることができるとのこと。那智の滝から車で30～40分なら、気軽に足を延ばすことができそうなので出掛けてみた。



らくだ舎での昼食は、鹿肉のハヤシライス。おいしかった！

らくだ舎のオーナーである千葉智史さん、貴子さんご夫妻は、色川に移り住んで約10年。来たときに地区の人口は約400人だったが、直近は約300人。人口の減少が急ではあるが、一方で移住する人もちらほらいるという。大化の改新（645年）の翌年の記録には色川郷18ヶ村が記されているそうで、平維盛の伝説も残るなど、歴史は古い。

以前から移住者が多いことで全国的に知られてきたが、その流れは今も続いているようだ。“色川のええとこいっばい発見発信情報誌”である「ええわだ！色川」を見ると、地域活動として「山里文化クラブ」「明るくする会」「色川花木園芸組合」「色川鳥獣害対策協議会」「色川青年会」「色川堆肥組合」が紹介されている。らくだ舎の仕事・活動も含め、新旧の住民が一緒になって経験や知恵を持ち寄り、スキルやネットワークを生かして地域づくりに取り組むとともに、情報発信にも努めていることがうかがわれる。

辺境故に歴史や伝統を生かしつつ、新しいものを取り込みながら、SNSや宅配も駆使して、21世紀の日本が進むべき道や未来を先取りして歩んでいるようにも感じる。また足を運んでみたい。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

1971年農林中央金庫に入り、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、2013年11月より現職。

棚田が広がり、家屋が点在する一角にらくだ舎はあった。木造ではあるが、予想と違い、明るくしゃれた空間で素晴らしい。東京の店ではめったにない居心地の良さを感じた。喫茶店であると同時に書店でもあり、編集・出版も行っている。店の奥は図書館になっており、点数は限られるものの、店主が厳選したさまざまなジャンルの良書が並ぶ。

建物は、共同経営している食料品・日用品店の「色川よろず屋」と一体的に造られており、らくだ舎がよろず屋の店番の役割を担っている。食料品・日用品も数は限られるが、良質で厳選された物ばかり。そして、ここは地域センター的な役割も担っているように受け止めた。